

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	濱野寛子
論文題目	言語のカテゴリー化に関する認知言語学的分析—助数詞の考察を中心に (論文内容の要旨)		
本論文は、認知言語学の枠組みに基づいて、日本語の助数詞のカテゴリー化のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。全体は6章からなる。 第1章では、本研究における助数詞の分析の背景となる認知言語学の基本的枠組みとして、経験基盤主義に基づく認知意味論を概説している。特に本章では、助数詞の言語分析に際し、認知意味論が前提とする事態認知、概念化、身体的経験に基づく外部世界のカテゴリー化のメカニズムの理論的な位置づけを概説している。 第2章では、日本語の漢語系列の助数詞 (e. g. 本、着、帳、冊、杯、対、発)、和語系列の助数詞 (e. g. つ、か[=日]、り[=人]、つき[=月]、え[=重])の言語使用に関する広範な事例に基づいて、国語学と日本語学の助数詞の主要な意味分析を検討し、これまでの助数詞の意味分析に関する次の問題を指摘している：(i)助数詞の使い分けの説明に際し、問題の助数詞と共起する名詞の意味属性を前提としており、問題の名詞の使われる文脈が考慮されていない。(ii)助数詞と共起する名詞の指示対象を言語主体がどのような視点、パースペクティブから把握するかが考慮されていない。(iii)助数詞と共起する名詞が使われる事態における人間の身体的経験に関わる要因が考慮されていない。本章では、さらに、これまでの助数詞の分析において等閑視されてきた、次の問題を明らかにしている：(i) 助数詞と数詞の共起制限、(ii) 一つの名詞と複数の異なる助数詞の共起性の制約、(iii) 通時的な視点から見た助数詞の発生の動機づけ、(iv) 助数詞の発生における言語文化的な知識の制約、(v) 数量詞遊離の観点から見た文中における〈名詞+助数詞〉の位置関係の制約（すなわち、〈名詞+助数詞〉が、文頭、文中、文末のどの位置にくるかの統語的制約）。これらの問題のうち、特に(i)の問題の考察は第3章、(ii) と (iv) の問題の考察は第4章と第5章の助数詞の分析の背景となる。 第3章では、認知意味論の基本的な枠組みを構成するカテゴリー形成、イメージ形成、スキミング、視点の投影、スキーマ化、スキーマ変換、等の認知プロセスの主要機能を概説し、日常言語の助数詞の表層分布とこの種の認知プロセスとの相互関係を考察している。これまでの主要な助数詞の意味分析では、助数詞の使い分けに関し、問題の助数詞と共起する名詞の意味属性の違いによる説明を試みている。この種の意味分析は、名詞の意味が、その指示対象（ないしは概念対象）を把握する言語主体の主観的な認知プロセスとは独立に規定できるという前提に立っている。これに対し、本章では、助数詞の使い分けは、問題の名詞の指示対象を解釈する主体の認知プロセスによって動機づけられている点を明らかにしている。例えば、「～枚」の場合、広くて薄い存在というカテゴリー形成とイメージ形成がなされるならば、紙、毛布、シーツ、等の名詞だけでなく、魚 (e. g. 「ヒラメを七枚釣る」、田畑 (e. g. 「田んぼを三			

枚植える」)のような名詞にも「～枚」が助数詞として共起できる。同様に、「～杯」、「～本」、等の助数詞は、容器性、線状性、等のカテゴリーを起動するイメージ形成と視点の投影の認知プロセスに関わる名詞と共起することが予測される。

第4章では、前章の人間の認知能力の役割に注目する認知意味論の観点から、ケース・スタディとして、助数詞の中でも特に注目されている「本」の分析を試みている。助数詞「本」に関しては、従来、伝統的な国語学、日本語学だけでなく、プロトタイプ理論に基づく分析を中心に認知言語学の枠組みでも分析がなされている。これらの研究では、細長い形状的属性を示す具象名詞（特にこの種の物理的対象を指示する名詞）をプロトタイプとし、この助数詞が共起する他の名詞類（e. g. 注射、電話、ホームラン、シュート、等）は、一次元的な軌道のメタファー写像による拡張事例として規定している。本章では、この分析に対し、次の問題点を指摘している：(i) この一次元的な軌道の拡張による規定は、助数詞が共起する名詞に関し過剰般化を防げない。(ii) この種の拡張は、知覚される対象の視覚的な認知による軌道性とこの軌道性のメタファー写像が中心になっており、他の認知モードの要因（例えば、主体の身体的な経験に関わる要因）を考慮していない。(iii) 助数詞の共起性の動機となる要因が、名詞の言語内的な知識に基づく要因を前提にし、問題の名詞に関わる言語外的な要因が十分に考慮されていない。本章では、これらの問題を考慮し、助数詞「本」の生起性を、主体の身体的な経験と言語外的な知識に関わる要因を考慮して分析している。この分析の典型例として、空間における移動可能性、モノのコントロール可能性、情報入力（ないしは情報生成）の継続可能性、等の要因に注目し、この種の身体的な経験に関わる要因との関連で、助数詞の拡張事例の一般的な説明を行っている。本章では、以上の助数詞の拡張事例に関わる言語現象を、作例による言語データだけでなく、小説、会話をはじめとするコーパスの統計的なデータに基づいて体系的に分析している。

第5章では、さらに助数詞の状況依存的な使用の側面に注目した分析を試みている。これまでの助数詞の分析では、言語主体が助数詞を使う際の、日常生活の状況、場面に關する言語外的な知識のドメインは考慮されていない。本章では、助数詞の拡張事例の用法の一部は、前章の要因の他に、主体の背景的知識によって形成される知識のドメインとその複合マトリックスが関わっている事実を明らかにしている。例えば、ホームランには「本」/「発」、電話には、「本」/「台」などの助数詞が共起するが、この種の助数詞の使い分けは、日常生活における知識のドメインの選択（e. g. ホームランの場合にはゲームのドメインか戦争のドメインかの選択、電話の場合には情報送信のドメインか通信機器としての道具のドメインかの選択）によって動機づけられている事実注目し、主体の背景的知識のドメインからなる複合マトリックスに基づいて、複数の助数詞の共起性を説明している。

第6章では、理論的観点からみた本研究の助数詞の分析の意義と今後の研究の展望について論じている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、認知意味論の枠組みに基づき、日常言語のカテゴリー化のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。

認知言語学の身体論的視点に基づく本論文の助数詞の研究は、従来の古典的なカテゴリー観の根本的な問い直しを図る点で重要な意味をもつ。古典的なカテゴリー観では、カテゴリーは明確な境界をもち、カテゴリーの成員は必要十分条件によって規定可能な共通の属性をもち、同等の資格でそのカテゴリーに帰属するという前提に立っている。これに対し、本論文の助数詞の分析は、外部世界の対象は、カテゴリー化に際して同等の資格で認知されるのではなく、典型的な成員から非典型的な成員へとグレイディエンスをなして相対的にカテゴリー化される事実を明らかにしている点に独創性が認められる。

ただし、本研究は、これまでの認知言語学が前提としているプロトタイプ理論が、助数詞による外部世界のカテゴリー化のプロセスを十全な形では説明できない点を指摘している。認知言語学のプロトタイプ理論は、スキーマ、放射状カテゴリー、プロトタイプ、等の概念に基づいて、言語現象に反映されるカテゴリー化のメカニズムの解明を試みている。また、これまでのプロトタイプ理論に基づく助数詞の分析は、言語が反映するカテゴリーを、意味レベル（ないしは概念レベル）のカテゴリーとして分析し、このレベルにおける助数詞のカテゴリー化の規定を試みている。これに対し本研究は、以上の意味レベルのカテゴリー化の分析では予測できない語用論レベルに関わる助数詞の事例を広範に分析している点が注目される。

また、本研究は、従来の認知言語学のプロトタイプ理論が前提とする典型的カテゴリーの主観的な規定を、助数詞の分析を通して批判的に検討している点に独創性が認められる。これまでの分析では、ある対象がプロトタイプのメンバーか周辺事例のメンバーかは、分析者の内省と直観に基づいて決定されてきた。この分析は、基本的にトップダウン的なプロトタイプと周辺事例の規定であると言える。これに対し、本研究は、広範な助数詞の具体事例の定量分析に基づいて、プロトタイプの事例をボトムアップ的に規定するアプローチをとっている。本研究の分析では、プロトタイプは内省と直観に基づいてトップダウン的に設定されるのではなく、助数詞の使用事例の頻度と類似度によって経験的に規定される。定量分析に基づく本論文の助数詞の分析は、これまでのプロトタイプ理論の方法論に対し根本的な問い直しを迫る点で、重要な意味をもつ。また、本研究の以上の分析は、近年、認知言語学の言語分析の主流をなす、事例の頻度を重視する用法基盤モデルのアプローチに対し、実証面からのサポートを与える分析としても重要な意味をもつと言える。

従来の助数詞の研究は、意味レベル（ないしは概念レベル）のカテゴリー化を反映する助数詞の研究が中心となってきたが、助数詞の表層分布に関わる統語的な側面と形態的な側面に関する研究は等閑視されている。本研究では、これらの側面に関わる研究として、助数詞と数詞の共起制限、一つの名詞と複数の異なる助数詞の共起性の制約、数量詞遊離の観点から見た文中における〈名詞+助数詞〉の位置関係の制約（す

なわち、〈名詞+助数詞〉が、文頭、文中、文末のどの位置にくるかの統語的制約)、等の問題を考察している。これらの問題は、特に日本語の形態論、統語論の制約に関わる助数詞の分析に重要な知見を提供する。

また本研究は、従来の意味論中心の助数詞の分析の限界を指摘している。これまでの分析は、助数詞の記述に際し、外部世界の対象の意味レベルないしは概念レベルの属性(例えば、「～本」の場合の長さ、細さ、等の属性、「～枚」の場合の薄さ、幅、等の属性)は考慮されていたが、外部世界の対象と相互作用する言語主体の身体的な経験に関わる要因は考慮されていない。また、これまでの分析では、言語主体が助数詞を使う際の、日常生活の状況、場面に関する言語外的な知識のドメインは考慮されていない。この意味論的な助数詞の分析は、一見したところ典型事例の助数詞の規定は可能であるが、周辺的な事例や拡張事例としての助数詞の用法の一般的な規定は不可能である。本論文では、助数詞の典型事例だけでなく、これまでの分析で例外的な現象と見なされてきた後者の助数詞の事例を、日常生活の状況、場面に関する言語主体の知識のドメイン・マトリックスに基づいて統一的に分析している。

以上の本研究の助数詞の分析は、言語学における人間のカテゴリー化のメカニズムの解明に貢献するだけでなく、日本語教育をはじめとする言語学の応用分野にも貢献するものと考えられる。助数詞は、日常生活において日本語学習者が習得すべき言語表現の一種であるが、学習者への指導や生徒自身の習得が難しい学習項目の一つとなっている。これまでの日本語教育の研究では、助数詞の意味と用法についての分類はなされているが、本研究が試みている言語主体の認知能力と背景的な知識のドメインとの関連からみた助数詞の体系的な分析はなされていない。本研究の線に沿って、助数詞の使用を、言語主体の認知能力と生活知識のドメインとの関連で記述していくならば、従来よりもさらに効果的な助数詞の指導が可能になると言える。

本研究は、主に共時的な観点から見た助数詞の分析が中心になっている。通時的な観点から見た助数詞の分析は、今後の課題として残される。また、本研究で分析の対象とした助数詞の事例は、新聞に代表される書き言葉のコーパスと作例が中心になっている。今後の研究としては、さらに話し言葉のコーパスに基づく助数詞の分析も進めていく必要がある。この方面の研究も、今後の研究課題として残される。

本申請者が所属する言語科学講座の目的の一つは、言語の構造、意味、運用、等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年10月5日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降